

Ⅱ 山口県の底延縄漁法

沖縄地区水産業改良普及員 金城 宏

1. 研修先

山口県玉江浦漁業協同組合

〃 越ヶ浜漁業協同組合

2. 研修者所属及び氏名

糸満漁協漁業振興会

大城 栄

大嵩 博美

鳩間 利夫

玉城 三郎

金城 幸栄

3. 研修年月日

昭和 48 年 10 月 11 日～10 月 18 日(8 日間)

4. 内容

イ. 漁業形態

山口県における底延縄漁業は、萩市地区を中心発展し、特に玉江浦漁協、越ヶ浜漁協が代表される。

漁船も 30～50 トン級の大型が多く、漁場は東支那海、黄海へと開発されている。

その漁法も底魚のアマダイ類、キダイ、グチ、フグ等が対象であり、支那海 200 m 等深線を大陸よりに操業が営なまれ透明度の低い砂泥地帯である。したがつて漁具は綿糸が使用され、1 日の使用漁具数も 150～200 鉢(1 鉢 300 m)で、昭和 30 年当時より 2 倍になり漁獲努力量の増大が図られている。稼動日数は漁獲物の処理が水蔵であることから有効鮮度を保持するため、その日数は平均 12 日限度のようである。

底延縄の漁具をその構造別に比較すると、おのづから業態の相違は認められるが、しかし、それぞれの地域の差異と特徴は有している。主として底延縄の構造をみると、漁具の構成は、主に底延縄本体と、底延縄に付属する各種の機械装置とに分けられる。主な機械装置としては、底延縄の揚げ下ろし装置、底延縄の巻き上げ装置、底延縄の張り替換装置、底延縄の洗浄装置、底延縄の修理装置等がある。また、機械装置をもつたがら水車一體から運搬装置などの構造の組合せを取り扱うものもある。